

# Hi! アンドレです

社会教育指導員  
アンドレ・エスタニスラオ



同僚の結婚式にて

10月8日、私は職場の同僚であり友人である女性の結婚式に出席しました。

結婚式は田村市船引町で行われました。私は日本の結婚式に初めて出席しました。だから、私は本当に驚き、強い印象を持ちました。花嫁さん（友人）は本当に綺麗でした。新郎もハンサムでした。

カップルは式の間は何種類かの衣装を身に付けていました。私は、餅つきに参加してとても幸せでした。私達は、新郎新婦のために餅をつきました。

食べ物と飲み物はとてもおいしかったです。私はテーブルの下にある大きいプレゼントを見

つけて驚きました。その中には、いろいろな食べ物や他にもすばらしいものがありました。

みなさんは結婚式の間、新郎新婦をスピーチや歌でとても祝福していました。そこには、愛と幸福があふれていました。日本の結婚式とフィリピンの結婚式は非常に異なっているのに、愛と幸福の感情は同じです。

私は小野町に住んでいるおかげで、この結婚式のようなすばらしいことを経験できることは、本当に幸運です。

## ふるさと小野町会 ふれあい通信

### 我が心のふるさと

中島 良一

(小野新町出身)



小野新町の東はすれに位置する、矢大臣が一望できる反町の牧牛山普賢寺は、石門を入ると広場の右側に太い2本の杉が、左側には東金虫がつくからたちの垣根その奥に、大杉がそびえ立っています。

本堂への石段は杉やひの木、けや木に覆われ昼間でも薄暗い、山門をくぐると石段が急勾配となり、登りきったところが本堂です。境内には大きな、いちようの木があります（現在は杉、ひの木、けや木の太木は切り倒され残ってはいません）。子供にとって跳び廻って遊ぶには恵まれ

過ぎた自然です。

そんな環境で素朴なわんぱく三味の少年時代を送りました。道端では桶屋の爺さんが、山桶のたがを作る長さ4・5間の竹を向こう3軒隣の軒先を我が物顔で、竹をなたのような道具で裂いて、前に後ろに移動させて、たが作りに精をだしていました。

畳屋の職人さんも、道端で畳の表替えをしていました。

18年間過ごした我がふるさとを、昭和32年の春、「アスカラ、シュツシャサレタシ」の1通の電報で慌しく、小野新町駅の、あの殺風景な地下通路を通って、悲しい別れをし、車中の人となり、途中なにを考えていたか思い出せないが列車も東京に入り四本の煙突が3本に、2本に、1本に見えた。おぼけ煙突”が大きくなるにつれ（現在は取り壊されていない）、数時間前に、ふるさとを離れた不安と、寂しさに襲われながら、成人式発祥の地、埼玉県蕨町に着いたとき、あたりは暗くなっておりました。

それから私のふるさとへの想いは、心の奥底の引き出しに大切にしまひ込まれたままのふるさとへの想いです。なかなか帰省の機会もありません。「ふるさと小野町」も著しい変貌を、遂げられておりますが、古き良き時代を守りつつ、町活性化の改革を望んでおります。